

気配り

自分で箸を取ろうとする人には、気配りが欠かせない。これについて、織田信長にまつわる次のような逸話がある。

ある時、信長が「誰か」と呼ぶので、ひとりの小姓が前に進み出ると「もうよい」という。そこで小姓はそのまま退出した。すると暫くしてまた呼ぶ声がする。別の小姓が前に進み出ると、やはり「もうよい」と言うのでその小姓も引き下がった。三人目の小姓が信長に呼ばれ、同じように「もうよい」と言われて引き下がろうとした時、部屋の隅に小さなゴミが落ちているのを見つけ、それを拾って下がった。信長は「人は心と気を動かすを以てよしとする也」と言って褒め称えたという。『備前老人物語』

呼ばれたから来た、もうよいと言われたから引き下がるというような、人に言われるままで何の気働きもない人は、合戦でも大した活躍は出来ない。実社会に生きる者は心と気を働かさねばならないことを教えた逸話である。

心と気を働かせるには、常日頃から深い洞察力を訓練することである。洞察力は様々な経験を経て培^{つちか}われるものであり、一般的には「察する」という言葉で表現される。察するとは、言葉を含むあらゆるコミュニケーション手段を使って、共感や同一化の状態を自分の内部にもたらすことである。

そもそもコミュニケーションとは、単なる情報交換や意見交換ではない。心と心が触れ合い、人格と人格が交わる中で共感しあい理解しあうことである。コミュニケーションを阻害するのは、話し手が自分中心に話をする場合であり、また受け手に「聴く姿勢」が欠けているばあいである。多忙や自分にしか関心がない場合に自己中心的となり「聴く姿勢」は失われるから、私心を排して素直になることが何よりも大切なことである。

なお、言語によるコミュニケーションは相手の神経を刺激し、身振りやしぐさといった非言語（ノンバーバル）のコミュニケーションは神経の周辺を刺激すると言われている。相手に影響を与えるのは、ノンバーバルコミュニケーションの方が強いことに留意しておく必要がある。

「察する」ということを踏まえ、その場における自分の立場を考えて、場全体の調和をもたらすような行動をとることで気配りは完成する。以前に聞いた話であるが、インドの王族がイギリスに招かれて食卓を囲んだ際、食卓上のフィンガーボウルの水を飲んでしまった。周囲の貴族はその不作法を笑ったが、その最中^{さなか}にホスト役のイギリス王は同じようにその水を飲んだのである。これを見ていた貴族たちは、自分たちのはしたない笑いを恥じて赤面した、という話である。

イギリス王の振舞いは人間関係の根本的態度を示しているが、それも気配りから生れるものである。それは、チェンジ・チェアーを基本とした洞察力と場に応じた振舞いに起因することを忘れてはならない。因みに、「察する」と「場に応じたの振舞い」からは「たしなみ」が生まれる。「たしなみ」を身につけた者は一挙一動が礼に^{かな}適い、周りに調和をもたらすと同時にその人の気品を^{かち}醸し出す。